

## 『子どもの貧困と子育て支援

### ～細部に宿る人権を護り、育てる～』

社会福祉法人 いし い き ねんあいぜんえん 石井記念愛染園 だいこくほいくえん 大国保育園

NPO法人 子育て運動えん



西野 伸一 さん

人権保育専門講座6では、大国保育園の西野伸一さんに「子どもの貧困と子育て支援～細部に宿る人権を護り、育てる～」と題して、松阪・鈴鹿・名張の3会場でご講演いただき、合計56人の方々の参加がありました。

西野さんは、大阪市西成区の釜ヶ崎において子どもの貧困が深刻な課題である状況下で、子どもや保護者がどのような生きづらさを抱えさせられているかということや、だからこそどんな取組を大切にしているかについて、詳しくお話しいただきました。

## ●日本最大の日雇い労働者のまち“釜ヶ崎（あいりん地区）にある保育園”

### （1）“釜ヶ崎”に集まる日雇い労働者

私は今年度(2019年4月)から大国保育園に勤めています。それ以前は、同じ社会福祉法人石井記念愛染園のわかくさ保育園で勤務していました。わかくさ保育園は、大阪市西成区の釜ヶ崎と呼ばれる地域にあり1970年に“子どもの権利を守る”ために、大阪市の要請で誕生しました。

1960年ごろの調査やまちで子ども支援をおこなっていた民間篤志家、永田道正さんの話では、釜ヶ崎の狭いまち(0.62平方キロメートル)のなかで不就学の子どもたちが約300人いたそうです。その中には住民票や国籍がない子どもたちもいました。

当時は、高度経済成長期の真ただ中で、たくさんの建設労働者が必要でした。国の政策として労働力を釜ヶ崎に集中させたので、現在でも町の人口の約9割が男性です。景気が良い間はたくさん仕事があり、ここで働いている人たちも生活が成り立っていましたが、景気が悪くなると、経済の調整弁として扱われ、失業していきました。最盛期は25,000人の労働者がいましたが、現在では約5,000人の労働者が日雇いの仕事に就いているといわれています。1990年代からホームレスの問題が顕在化しました。現在は労働者の高齢化が地域課題となっています。そして今でもたくさんの方が路上での生活を余儀なくされています。

### （2）“釜ヶ崎”の暮らし

このまちには、萩之茶屋小学校がありました。その小学校は2016年に閉校になりました。地域住民は小学校がなくなることで「子どもたちの声がこのまちから消えるのではないか」という不安を感じていました。私たちはこの釜ヶ崎で保育をし、子どもたちが笑顔で暮らすことのできるまちをつくろうと考えています。そのためには、子どもを中心としたまちづく

りをしなくてはならないと考えています。保育園は、単に狭い意味の保育という役割ではなくて、まちづくりとLife（人生）にかかわる大切な仕事としての役割が求められていると考えています。

西成区は3つの差別をかかえています。1つめは釜ヶ崎に対する差別です。2つめは、区の北西部と浪速区に広がる当時西浜と呼ばれた西日本最大の被差別部落に対する部落差別です。3つめは、在日コリアンの方に対する差別です。この3つの差別を解決していくまちづくりを子どもたちと一緒に考え進めており、差別の克服は私たちの使命だと思っています。

### (3) おっちゃんとのかかわりのなかで見えてきたもの

三角公園（萩之茶屋南公園）という有名な公園があります。この三角公園では、ブルーテントで生活をされている人がいて、子どもが遊べる場所がありません。「公園にいる人は怖い人」と思っている地区外の子どもたちがいたので、子どもにおっちゃんのことを知ってもらうために、「げんきまつり」という地域のみんなが一緒になって遊ぶ取組がおこなわれ、今も続いています。遊び終わった子どもからは「おっちゃん優しかった」という声が聞かれ、偏見や決めつけが変わっていくのを感じます。変わらないのはおとなの意識です。

**小さい頃から顔が見える関係、環境をつくり、人権について肌で感じ、考える活動をしていくことが大事だと思っています。**



### (4) 子どもたちを育てていくなかで

1950年代から、子どもたちの生活環境は都市化されてきました。遊び場だった道は車に奪われ、空き地もすべて似通った公園になり、禁止事項ばかりが増えています。

子どもの世界はおとな化が進み、画一的な価値観や過度な競争が格差や貧困を生じさせています。階層化された社会の中で非効率的なものに対する排除、人間疎外というものを感じます。

子育てをするなかで、昔、地域にはコミュニティルールやお互い様という関係性（互酬性）がありましたが、今は人と人との関係が分断されてきています。そして、「正しさ」ばかりが求められる社会のなかで、子どもや母親がどんどん追い詰められています。

おとながよく口にする言葉は今の社会状況を表しています。それは次のような言葉です。

**「早く(しいや)」「きちんと(しやなあかんで)」「たくさん(勉強しなあかんで)」「(みんなと)同じように」「なぜ効率的にできないのか」「失敗しないように」**

これらの言葉は、すべて“モノ”をつくるときに使われる言葉です。工場でモノをつくる時（大量生産）には「早く」「きちんと」「たくさん」「同じものを」「効率的に」「失敗がないように」といった言葉が使われます。子どもを育てていくなかで、モノをつくる時と同じような言葉がけをしてしまうことがあります。



**ただ、子育てをするなかで保護者や教育に携わる私たちが、こうした言葉を使わざるを得ない状況に追い込まれているのです。その社会の状況を変えていかなければなりません。**

## ●子どもの貧困と虐待

### (1) 子どもの貧困について

「子どもの貧困」は深刻化しています。貧困率は前回調査と比べて2ポイントほど下がりましたが、それでも7人に1人の子どもが貧困の状態にあります。乳幼児期に貧困状態で育った子どもには、以下のような影響があります。

#### 【乳幼児期に貧困状態で育った子ども】

- ① 人と人のつながりを保つのが難しくなる
  - ② 働くことや社会参画ができなくなる
  - ③ 人としての可能性が大きく奪われる
- ※保護者は、安心して子育てができなくなる



「貧困」は虐待やDVといった暴力と表裏一体の関係にあることが見えてきました。7人に1人の子どもが相対的貧困の状態にありますが、それは、その1人の問題ではなく、6人も含めた社会全体の問題として考えていくことが大切です。

### (2) 虐待について

児童相談所が対応した児童虐待の件数は15万件を超えました(2019年8月1日厚生労働省)。これはあくまで氷山の一角であり、まちの中には今も一人で悩み、苦しんでいる子どもや保護者がいます。

#### 【虐待に至る原因】

- ① 「子どもに起因する要因」・・・低体重、病気や障がいのある子どもなど
- ② 「親自身の要因」・・・親自身の育児不安、精神疾患、母の被虐待歴など
- ③ 「社会的な要因」・・・核家族化、地域との関係が分断されている家族など

こうした要因によって、親は育児不安やストレスを抱え、孤独や孤立を感じていきます。これは、どこの家庭にも起こりうる全国的な問題です。虐待は実母からの割合が最も高く、その背景には「正しい母親でなくてはならない」「母性神話」などの見えない社会からの抑圧や強迫感によって追い込まれている状態の人が多くいます。現代の母親の子育て能力が決して低いわけではありません。それだけ親が子育てしにくい状況に追い込まれているのです。



一人が抱える悩みや不安がその人自身の問題として片づけられてしまいます。そうではなく、社会の問題としてみんなが考える問題です。

## ●事例から考える

### (1) 幸ちゃん親子との出会い

精神疾患をかかえながら子育てをされている親子との出会いと、その親子に教えていただいたこととお話しします。幸ちゃん(仮名)親子とは、幸ちゃんが2歳のときの入園を機に出会いました。ある日泣いている幸ちゃんにお母さんがきつい口調で当たっている場面に出会いました。このことがお母さんの話を聴かせていただくきっかけとなり、さまざまな学びにつながっていきました。

## (2) 虐待とトラウマ

入園して少し経った頃、幸ちゃんは頭部外傷により入院しました。病院は虐待を疑い、幸ちゃんは児童相談所で一時保護になりました。児童相談所に呼ばれた母親は「虐待を認めたらあなたに子どもを返すことができるよ」と言われたように感じました。お母さんは、「私は虐待なんてしていない。誰も私のことを信じてくれない」と思ったそうです。

毎年12月25日が近づいてくると、「無理やり子どもが奪われてしまうのではないか」といった不安から精神状態が不安定になります。幸ちゃんが一時保護になった日がトラウマになっているからです。「誰も頼ることができない」という状況のなかで、お母さんは子育てに行き詰まりを感じていきました。幸ちゃんが泣くと、「自分は虐待母として見られるのではないか」といった極度の不安に苛まれ、どうしていいか分からず子どもを力で抑えるしかなくなりました。その度に自分を責めました。

## (3) DID（解離性同一障がい）と母親の被虐待体験

お母さんに DID（解離性同一障がい）の症状が出現しました。当時、お母さんのなかには5人の人格が存在していました。「人はこれ以上耐えることのできない苦痛や死の危険を感じる」と、自分のなかに別の人格をつくり、その苦痛を背負ってもらうことで生き延びようとしています。これ（疾患）はお母さんの生きていくための手段でした。「私は虐待なんてしていない」というお母さんの言葉は嘘ではないと考えています。そのときは別の人格になっていたのが本当に身に覚えがないのです。

疾患の原因は、お母さんの生育歴にありました。お母さんの生きづらさの背景には、お母さんが幼少期に受けた虐待がありました。お母さんは何年も虐待に耐え続け、高校を中退して家から逃げ出すことができました。そして、たくさんのまちを転々としてきました。問題が起こると違うまちに移り住んで生きてきました。「まちのなかで自分の存在はほぼなかったに等しい」とお母さんは語っています。そのまちで生きられなくなったら、そのまちから姿を消してしまい、姿を消してしまうので、一人で問題を抱え、問題が見えなくなっていくます。



**表面に出てくるものには背景があります。その背景を見ていくと、「困った親」ではなく「困っている親」であることに気づきます。私たちは、どうして問題行動を起こすのかということを見ようとしたり、知ろうとしたりする感性が求められます。**

お母さんの被虐待体験を過去のものにする（回復）ために、私は“MY TREE ペアレンツ・プログラム”を紹介しました。このプログラムは、虐待に追いやられた母親の回復プログラムです。私は「虐待からの回復というのは、幸ちゃんとの関係だけではなく、お母さん自身が幼少期に受けた虐待によるトラウマからの回復を可能とするプログラムでもあるんですよ」とお母さんに伝えました。すると、お母さんは、「自分の回復にかけてみたい。挑戦してみたい。自分は子どもに手をあげるのはもう嫌だ」と自分自身への可能性にかけ、このプログラムを受け入れてくれました。

#### (4) 「人格的な交流」と「伴走」

私たちは保育園だけでなく、さまざまな機関の連携による支えがなければ回復につながる事ができないと考えました。そこで、医療にかかわる専門家も交えたネットワーク、アクショングループをつくりました。母親にも精神科の受診を勧めました。つなげるではなく、一緒につながるということが重要だと考え、私たちは病院へ同行しました。

お母さんは、幸ちゃんと「一体化した関係性」(\*)のなかで生きてきました。めざしたのは一体化した人間関係を「緩める」ことでした。「解決」をめざしてしまうと、支援者は「正そう」としがちです。それは、支援者が考えるゴールであって当事者の主体性を奪ってしまうことになります。私たちは、当事者が自分の生き方を自分たちで決めていくことをサポートしていくことを心がけました。まさに当事者主体です。

(\*) 一体化した関係性…親子はそれぞれが独立した別な人格としての存在であるが、そう捉えることが難しくなった共依存的な状態。

しんどい人ほど、SOSを出せません。そこで重要となるキーワードが「人格的な交流」と「伴走」です。私たち支援にかかわるものは、この時期に、「親や子どもと向き合うのはもうやめよう」と話し合いました。

「向き合う」のではなく、「隣にいる存在になろう」としました。言いかえれば、共に感じて、共に苦しむ(共感共苦)ということです。アドバイスではなく、「聴いてほしい」「わかってほしい」というお母さんの思いや願いを知りたいと思いました。



#### (5) 承認

一人ひとりを「承認」していくことが重要です。重要な承認には2つあります。

##### ① 存在承認…「あなたがいてくれる」と存在そのものを認める

※名前を呼んだり、挨拶をしたり、スキンシップをしたりすることが、存在そのものを認めることにつながっていきます。

##### ② 行動承認…事実をそのまま伝える

※散髪した人に、「髪の毛切られたんですね」と事実気づくことの方が大切です。「髪型似合っているね」等、自分の主観的な評価を入れるのではなく、ありのままの姿を承認していくことが大切です。

#### (6) 回復 (レジリエンス)

お母さんの精神状態によっては、「今日一日お母さんは休憩して、いい状態で明日迎えに来てください」と話をして、幸ちゃんを地域にあるファミリーホームに泊める(地域で民間による緊急一時保護)こともありました。医療、福祉、保育園が連携をしながら、粘り強くお母さんの回復を図っていきました。

数カ月経ったある日、保育園に迎えに来た時お母さんは、比較的明るい表情になっていました。職員室に立ち寄って話をしていかれるのが日常の光景だったのですが、その日も職員室に入ってみえたので、お母さんの話を聴くことにしました。その際、お母さんが「あの子(幸ちゃん)はいいな。私は幼いころからSOSを出したり、人に助けってもらったりしたことがない。

それは負けだと思っていたから。でも、あの子はそれができる。あの子はすごいな」と語られました。この会話「あの子はいいな」は、母と子の一体化していた関係から、子どもを一人の人格として見ることができるようになった象徴的な表現と出来事です。「あなたも一人の人格として大切にされるべき存在なんですよ」というメッセージが伝わった瞬間だと感じ、職員みんな嬉んだことを覚えています。



人はいくつになっても回復していくんです。「人に頼ることがあってもいいのだ」と自分を許していく作業が大切です。私たち支援者は、周りからあたたかく包む存在でありたいです。お母さんは今、「私、誰か人の役に立ちたい」と言っています。

## ●地域における新たな支え合いの社会を求めて

### (1) 地域で支えるネットワーク

西成区には地域で子どもを支える2つのネットワークがあります。1つは「要保護児童対策地域協議会」(以下、要対協)です。要対協は全国に設置されていますが、機能している自治体は非常に少ないです。西成区では、中学校区ごとに要対協のケア会議をおこないます。毎月一人ひとりの子どもたちについて地域の関係者(保育園、小学校、中学校、高校の先生も参加、公私の機関や民生委員、区役所など)が集まり丁寧に情報共有とアセスメントや役割分担がなされています。

そして、要対協のように何か問題が起きたときに早期発見・早期対応をするためのネットワークだけではなく、予防のための視点をもったネットワークが必要ではないかと考え「わが町にしなり子育てネット」(以下、子育てネット)というネットワークをつくりました。虐待をゼロにするためには、子育て・子育て支援がセットになっている必要があります。

### (2) 地域社会、地域住民による福祉活動

次に「地域福祉」です。地域福祉とは地域による福祉です。単に地域で行っている福祉活動では「地域福祉」とは呼べないと私は思います。「in」「for」「with」「by」で考えてみます。

「in」・・・単に地域のなかにある施設、単に地域のなかにある学校なのか

「for」・・・地域のための施設なのか、地域のための学校なのか

「with」・・・地域と共にあるのか

「by」・・・地域住民自身が福祉活動をつくりだすのかどうか

私は「in」から「for」、「with」から「by」をめざしていくことが地域福祉だと考えています。つまり、「地域社会・地域住民による福祉活動」こそが、「地域福祉」だと考えています。そのため、要対協も地域の人たちと共に進め、発展させていきます。子育てネットの活動も地域住民と一緒に進めています。

### (3) 「なぎさ化」していくことの大切さ

相手の立場に立つのは容易ではありません。だからこそ立ち続けようと努力することが大切です。当事者に隣り合い「共感共苦」しながらかわり続けるためには、医療、福祉、教育などの垣根をなくし、地域との境界線を「なぎさ」にする必要があると思います。「なぎさ」というのは、“ここからが陸地で、ここから先は海”ということがはっきりしていない場所のことです。さまざまな主体が協働する場なのです。それと同様に、私たち保育者と地域の関係も「なぎさ化」していくことが大切だと考えます。



## ●参加者アンケートより

- 子どもの貧困に関して、“貧困＝経済の問題”というイメージがありました。話を聞いて、虐待やDVも関係していることが分かりました。保育園で働くうえで、保護者のケアも大切にしていきたいです。
- 子どもの貧困は7人の中の1人の問題ではなく、6人が考えるべき問題という言葉が心に残りました。“向き合う”ではなく、“隣り合う”という視点を初めて気づかされました。目の前の子どもや保護者とのかわりについて考えていきたいと思います。
- 近年、虐待によって小さな命が亡くなるニュースをよく見ます。「なんで自分の子どもを虐待できるんだろう」「最低だな」と考えていました。しかし、この講座を受けて、考え方が変わりました。虐待をしてしまう母親の背景を知ることがどれだけ大切なのか、私たち保育士は子どもだけでなく保護者の支援もしていく必要があります、それにより虐待が少しでも減っていくかもしれません。保育士という立場の重要性を感じました。
- とても分かりやすかったです。貧困や虐待等の話でも、苦しい気持ちになることだけではなく、支援者、保育士として語られ、とても勉強になりました。講師の先生と同世代、園での立場など、ほぼ同じですが、すばらしい考えをおもちだと感じ、焦るような、もっと勉強をしたいという気持ちになりました。
- 子どもの貧困について問題になっていますが、実際の事例をあげられ、よくわかる内容でした。すぐに解決できるような問題ではありませんが、日々の保育の中で少しでも子どものためになるような行動がとれるようにしていきたいと感じました。